

山とスキー

記事

アイヌ語地名に就て……………加納生(二)

スキー地としての蝦夷富士……………六鹿一彦(一〇)

圖版

リシリヌブリ……………寺嶋修吉(九)

第六號

野球用具
庭球用具
各種服裝

一式販賣

龜谷

運動具店

札幌區南二條西一丁目
電話三五〇三番
振替小樽四五〇三番

アイヌ語地名に就て

北海道旅行者の爲に

加 納 生

生顔常、有良、二七、詩歌論、凋寒、濃晝、長萬部。こ
うならべてみて、すらすらと音讀の出来る人はあまりない
であらうと思ふ。

これが北海道に、地名として用ひられて居るのである。
長く北海道に親しんだ人であれば、兎も角だが、地圖を擴
けて難なく地名を讀みこなすことは一寸無理である。函館
から室蘭根室位の大きな所とか鐵道の沿線ならば可なり呼
びならはされて居るからいゝが、鐵道を離れて一步、山へ
でも這入れば尠からず、此うした出鱈目な當字に、ほとは
と閉口してしまふ。北見を歩るいたゞきであつた。まだそ
の時分、鐵道が開通して居なかつたのであるが、鬼志別の
ことをキシベツと讀んだら、そんな所は知らないと思ふ。

一つの字を二様にも三様にも讀むことを知つて居る人なら
旅人が此う讀違つても、「あ、オニシベツの事ですか」ミ
合點して呉れるが、淋しい開墾道路の傍に働いてゐる人は
多くは此程の知識も持つてゐない。アドレスを書いてても、
假名を附けて置かねば、電報一つ受取ることも難しいと思
ふ始末である。

此うした北海道の地名の難解は、主としてアイヌ語の音
譯に依つて居るのであることは申すまでもない事である。
アイヌ語音に漢字を當てる。その當て方が、中には傑作も
ないではないが多くは出鱈目か、無理なこじつけである。
その上に、漢字を當てゝ立派に本邦在來の地名らしく出來
あがるミ、字を當てる時の出鱈目や無理算段を忘れてしま
つて、漢字の發音通りに讀む様になつてしまふ。Township
に頓別と當て、此をトンベツと訓む。それが終ひには濱頓
別、中頓別をハマトン、ナカトンで片付けてしまふ。

更に此處にあの外國語の様な發言を意面もなく用ふ東北人がアイヌ語を誤り發音する所から此の地名の當字に就てもその影響が加はつて更に面倒なものとなつてゐる所がある東北人に北海道に就て或人は此んな事を云つた。同じ植民地でも滿州に北海道を較べると北海道の方が文化の程度が低い。と云ふのは、東北人が多く入りこんで居るからである。日本の地方的文化は東北人の密度によつて推すことが出来る。だから、青森、秋田あたりよりは北海道の方が文化が運んで居るのである。

少し横道へそれたが、北海道を旅行するに、此の地名に表はれたアイヌ語を幾分か知つてゐれば、便利で且興味あることと思ふから、次に簡單に記して見る。僕は言語學者でも又、考古學者でもないのだから、以下に記すものには何等の獨創もない。ノートに書きつけたのを整理しただけで、發音は主に Rev. John Batchelor 氏の辭書に依つた。

二

アイヌを壓しのけて侵入して來たシヤモはアイヌが文字を持たなかつた事によつて非常に苦しめられて居る。一層、札幌、旭川などの街名の様に又植民區劃地の様に一切番號で第何郡第何村と云ふ調子で行けばよかつたであらうが

北海道の地名を、アイヌ語に關するものゝ然らざるものゝ二に區別することが出来る。アイヌ語に關せざるものは、函館、北見、日高、中川郡、福山等であつて、アイヌの慣稱を離れて地文的又は人文的に付けたものである。例へば北見とは快晴の日に北方、樺太の岬を望見し得る故にかく呼ぶと傳へらる。又函館は加賀守の館址、箱の形をなせしより名付けられたりと云ふが如きである。

さてアイヌ語に依るものは更に二に區別する事が出来る即ち音譯と意譯とである。平岸(ヒラケシ *Pirakechi*)と砂川(スナガワ、*Onashina*)とは各その一例である。地名の大多數は音譯に屬して居る。が中には音譯、意譯を混合せるものがある。例へば浦河(ウラカワ、*Urapka*)に於ける *Ura* は浦を以て當て *pa* だけ河と譯して居るが如きである。

尙注意すべきことは、意譯、音譯兩方をやつて居る所がある。歌志内(砂川)に於けるが如く、歌志内は *Onashina* を音譯したのであつて、オタは砂、シは大なる、ナイは川と云ふ意から砂川と譯したものであるが、此が相近く且別の地名として用ひられて居る。旭川と忠別との關係も同様である云はれて居る。忠別は *Chuppet* に當て、チウツプは大陽と云ふ義から之を旭川と譯して之又別個の地名として用ひられて居る。

三

當字も本來の音を離れて見て、如何にも地名らしくいゝ感じのするものもある。砂流(サル)野塚等の如く。而してまた甚だ殺風景なものもある。錢函(ゼニバコ)千代節(チヨブシ)などの如く。地圖を擴げて此云ふ地名ばかりよく考へて見て居ると色々のもが出て來る。詩歌論(シカルン)の如きに到つては、此が地名だ云ふのだから驚くの外はない二七(ニナナ)と云ふのも、番號ではなしに *Nina-nai* を音譯したのだ云ふから、こちつけも甚しい。又 *Konashi* 云ふのは林野の意味であるのに此に毛無(當字するのは意味が全然背馳して面白くない事だ。

アイヌ語地名の意味は大部分、地形から來て居る。山、河、沼、崖、等の特長を以てその地名とすることは幼稚な人々には至當の事である。だから、ト(沼)ピラ(崖)ナイ(河)ベツト(河)等は到る所に表れる。ピラは多く平ナイは内、ベツトは別の字が當てられ、此の漢字通り發言せられる。アイヌ語には元來濁音云ふのがない。それに別(ベツ)と云ふ字が到る所に發音される。

地形の特長を地名にすることゝ、交通の範圍が小さかつた爲に、相離れた各地方に同一の地名が生ずることは止むを得ぬことである。To-pain 沼の口、と云ふ所が一寸見ただけで五つもある。所かそれが五つとも、違つた字で當てゝあるのも妙である。東沸、遠太十弗、濤沸、遠佛。

大きな所ではこんなことがないが同一土地で異つた字を當て、用ひて居るのには閉口する。公衙の標札などにも見かけた。例へばオヌツプナイを尾延内と書いたり雄信内と書いたりして居る。

四

當字が如何なるアイヌ語に當てられたものであるかと云ふことを檢索するのに困難を來す場合が應々ある。サツボ口の如きは、*Sai-poro* として明かに知り得られるが苦小牧の如きは次の三種に分れる。

To-mak-onai 沼の後の所
To-mak-onai 沼の後から來る流
Tomak-onai 沼の所

バチラー氏は後者を正しいとして居る。又、愛別、厚別等の如きも各四つの異なる意味に還元し得られる云ふ。アクセントを無視した上に、チとツ、シミス、イミエ等の發音の不完全により誤り傳へられた所が多い。一般に北海道の人は此の種の發音の誤謬が多い。ナミオ、エミエなどの文字の使ひ方を解くにはまだまだ遠い。夜學校の兒童によつて僕は此の事を痛切に教へられた。

北海道の地名は、異つた意味の發音に同一字を當てたり同一意味の發音に異つた字を當てたりして、元來は簡單な稱呼を恐ろしく複雑にしてゐるのである。地方當局者が地名に就て、もう少し考慮を拂ひ、新しく開く土地の命名だけ

北海道の地名にあらはるる主なるアイヌ語とその意味

Ahun	内に這入る。	〔阿分類、アフンルイ Ahun rui〕
Ahui, Ahuni	入口。	
Akan	造られたる。	〔阿寒岳、アカンダケ、Akan-pet-nupri〕
An	有る。	〔似灣、ニワン Ni-an-pet〕
Anne	細き。小き。	〔姉別、アネベツ Anne-pet〕
Ara	側。美なる。	〔荒平、アラピラ Ara-pira〕
Ashbe	魚の背鱗。	
At	豊かなる。	〔厚苔、アットマ At-tomai〕
At	輝ける。	〔厚眞、アツマ At-ma〕
Cha	海岸。河岸。	〔西舎、ニシチャ Nishiu-cha〕
Chashi	園。堀。城。	〔茶志内、チャシナイ Chashi-nai〕
Chep	魚。	〔智恵、チエブン Cpeh-un〕
Chikap	鳥。	〔近文、カプミ Chikap-uni〕
Chishi	峻しき道。	〔落石、オツチシ Ochishi〕
Chiu, Chiwe	河の流。	〔忠別、チウベツ Chiu-pet〕
Chuk	秋。	
Chup	太陽。	〔忠別、チウベツ Chup-pet〕
E	濃汁。	〔江別、エベツ Epet〕
Een	鋭き。	〔恵庭岳 Een-iwa-nupuri〕
Fure	赤。	〔振別 Fure-pet〕
Furu	小山。坂。	〔富良野、Huranu-kotan〕
I	所(又は時)	〔國縫、クヌイ Kunne-i〕
Ishikari	回轉する。	〔石狩川、イシカリガワ Ishkri-pet〕
Iso	裸岩。(海岸の岩)	〔磯谷、イツヤ Isoya〕
Ka	上。	〔野塚、ノツカ Notka〕
Kamui	神。形容詞的意味。	大なる。善き。美なる。
Kari	輪行する。通る。	〔然別、シカリベツ Shikaripet〕
Karu	凸凹ある。	〔輕川、ガルガワ Karupet〕
Ke	所。	〔音更、オトフケ Otop-ke〕
Kenash	林野。	〔幌毛無、ホロケナシ Poro-kenash〕
Kesh, Gesh	端。下。終。	〔古丹岸、コタンケシ Kotangesh〕
Koi	海波。	〔聲間、コイトイ Koi-tui〕

でも、何等か統一を付けてもらひたいものである。又、無名の山岳に新稱を附する場合も、卑俗な遊覽地的な、いやに名所張つた命名法を廢して素直な、ナチュラルな名を探つてほしいものである。

五

山地、僻隅に於ては、而しながら幸に此の當字がまだ用ひられてないから、氣持がよい。今後段々開けて來れば此れもやがて、奇妙な當字に更へられるであらうが、なるべくは假名のまゝで残して置きたいものである。

次の表は北海道の地名によく表れるアイヌ語を摘録して見たのであるが、此によつて大體の見解を得るこゝから出來よふと思ふ。前に云つた様に地名は主にその土地の特長をさらへて呼ばれて居るから、大低の場合地名によつてその土地の有様を推定することも出来るわけである。例へば海邊に云ふのはその漢字の示す意味ではなく、marpet 即ち灰の川に云ふ意味であつて火山灰地の川と云ふ様な事を想ひ得るわけである。別表によつて本來の意味に還元する場合にも簡單、明了に解し得るものと然らざるものとがある。例へば前に記した様に、アイヌ語が種々にあてはめ得らるる場合があるから此の點は注意しなければならぬ。ペット (Pet) ミナイ (Nai) の區別、或ひはエラ (Era) トー (To) ソー (So) の意味などは山へ入る時には覺えて居れば尠からず得る所があらふと思ふ。(完)

〔スキー地としての蝦夷富士(續)〕

之を廻轉しつゝ降れば随分の滑り手がある事は察知され様約言すれば蝦夷富士はスキー登山地として豊富なる特點を多く有して居るが、特に我々が最有意義に此の山をスキー地として利用し得ると思ふのは初心者高山型の山岳に慣れしむる爲に登る時だと思ふ。最危険少くして且容易に其れに慣れる事の出来るのは此の山である。殊に急傾斜面に對する感覺を馴致して恐怖心を去るには適當の地だと思ふ。唯雪質がスキーに好適であるのは十二月から一月までの極めて僅少の間で、しかも餘程好都合の日を選まぬスキー登山の範圍外に出てしまふから、其處に危険が伴つて來る。しかし又一方から云へば之が爲に平凡單調を破つて感興を増すものである。此の雪質の點で蝦夷富士は一の大なる魔物である。易々樂々山頂を窮める事も出來れば、又六合目で無慘にも追ひ返へされてしまふ事もあるのだ、羊蹄山は矢張名稱以上の難物である。練習用の高山型山岳だして輕蔑しては死別岳と改稱しなければならなくなるであらうに附言しておく。

Ohot	深い。	〔乙内、オツナイ Ohot nai〕
Oma, Omai	含む。ある。所。	〔猿間、サルマ Sara oma〕
Omap	所。又は沼。	
Onne	老いたる。貴き。大なる	〔恩根内、オンネナイ Onne nai〕
Oro	ある。傍の。	〔名寄、ナヨロ Nai oro〕
Ota	砂。(濱)	〔小樽、オタル Ota ru〕
Oto, O	ある。	〔白人、シロト Chrioto〕
Pan	下。口。Pen と對す。	
Pangepet	下流。	
Para	口。廣き意。	〔荊苞、バラト Parato〕
Pe	所。物。	〔留邊葉、ルベシベ Rupeshpe〕
Pe	Pet の約語	〔興部、オコツベ Oukutpe〕
Pekere	光。	〔邊景禮、ペケレイ Pekere〕
Pen	上。源。谷の上方	
Pep, Pepe	濡れる。	〔邊別、ベベツ Pepetkotan〕
Pesh	平なる山側。崖。	〔別荊、ベツカリ Peshtukari〕
Pesh	下る。懸る。源に向つて	〔留邊葉、Rupeshpe〕
Pet, Pe	河。兩岸の低き河なり。Nai と異なる。	〔幌別、ホロボツ Poropet〕
Petcha	大河。	〔別茶路〕
Pinne	雄。	〔敏音知、ピンネシリ Pinnshiri〕
Pira	斷崖。	〔古平、フルヒラ Furepira〕
Pip, Pipok, Pipo	沼又は沼地。	〔美唄、ピバイ P'pai〕
Pirika	善き。	
Pit	小石。	〔太櫓、フトロ Pitorokotan〕
Pitara	河床の石ある所の乾ける部分。	
Piuka	石多き河床。	〔ピウケナイ、Piukanai〕
Pok, Poke	下に。影に。	〔比甫久、ピボク Pipok〕
Pon	小さき。	〔小泊、ポントマリ Pontomari〕
Poru	大なる。廣き。	〔幌後、ホロシリ Poroshiri〕
Putu	河口。小河の大河へ流れ入る口	〔勇佛、ユーフツ Yuputu〕
Rap	降る。	〔遊樂部、ユウラブ Yurap〕
Ran (pl.Rap)	下る。	〔室蘭、ムロラン Moruran〕
Repun	海。	〔禮文〕
Ri	高き所。	〔利尻、リシリ Rishiri〕
Riya	滞在する。	〔利矢古丹、リヤコタン Riyakotan〕
Ru	道路。線。	〔蘭留、ランル Ranru〕
Rui	大なる。	〔累蘭、ルイラン Ruiran〕

Kop	灌木の生ずる小山。	〔達媚、タブコブ Tap kop〕
Koro	の。傍。所有する。	〔處川、トコロカワ To koro pet〕
Kot	所有する、Koro の約語	
Kot	穴。小谷。堀。	〔生顔常、モイコツネ Moi kot nei〕
Kotan	村。所。	〔床丹、トコタン To-kotan〕
Kucha	獵小舎。漁舎。	〔草内、クツチャナイ Kucha-nai〕
Kunne	黒き。	〔群別、グンベツ Kunnepet〕
Kush	渡る。	〔釧路、クシロ Kush ru〕
Kut, Kute, Kutchitui	岩。斷崖。	
Ma	半島。沼湖。小島。	〔厚真、アツマ Atma〕
Machi	妻。	〔松音知、マツネシリ Machi-neshiri〕
Mak	後方。	〔麻君別、マクシベツ Mak un pet〕
Map	多く Omap の約語。	
Me	寒き。	〔雌阿寒岳、メアカンドケ Me akan pet〕
Mem	沼。湖。	
Mena	池。	
Mo	静かなる。	〔紋別、モンベツ Mo pet〕
Moi	静なる所。平地。海灣。種前。	〔タネマエ Tanne moi〕
Mui	扇狀地。	
Nai	流。谷。高き兩岸を有する河。又は水無き溪谷。	〔幌内、ホロナイ Ponoai〕
Nam	冷。	Namw akka
Nan	顔。	〔ノカナン、Noka nan〕
Ni	樹。	〔似灣、ニワン Ni an pet〕
Nish	雲。天。	〔錦多布、ニシタツブ Nishtap〕
Noshike	中央。	〔大樂毛、オタノシケ Ot noshke〕
Not, Notu	岬。	〔野付、ノツケ Not ushike〕
Nup	平原丘。頂の平き山。	〔幌延、ホロノブ Poro nup〕
Nupki	濁れる泥だらけなる	〔野吹川、ノブキガワ Nupki pet〕
Nupuri	山。	
Nupuri-po	小山。	
Nupuri-shut	麓。	
Nupuri-tapka	山頂。	
Nupuri-uturu	谷。	
O	河口。	〔尾幌、オボロ Oporo pet〕



Ruru	海。	〔留萌、ルモエ Rurumope〕
San	下り。坂。	〔盤螺山、バラサン Parasan〕
Sanne	傾斜せる。	〔珊内、サンナイ Sannenai〕
Sara	原野、(莎草の生ゐたる) 茅。	〔猿拂、サルフツ Saraputu〕
Sat	乾ける。	〔札幌、サツボロ、Satporo〕
Shi	大なる。真なる。	〔士別、シベツ Shipet〕
Shike	場所。	
Shinoro	河口。	〔篠路〕
Shipet	本流。	〔後志、シリベシ Shipet〕
Shipi	回轉する。圓き小石	〔志比内、シビナイ Shipinai〕
Shirara	潮。	〔白糠、シラヌカ Shiraraika〕
Shiri	陸地、又は島。	〔國後、クナシリ Kunneshiri〕
Shuma	石。	〔島歌、シマウタ Shumaota〕
Shut	麓、又は丘。	〔静内、シズナイ Shutnai〕
So	瀧。	〔暑寒別、シヨカンベツ Sokanpet〕
So, Sho	露岩。	
Ta	掘り出す。	〔樽前、タルマイ Taruomai〕
Tai	森林、	〔多寄、タヨロ Taioro〕
Tap	圓頂丘。	〔達娯、タブコブ Tapkop〕
Teine	濕れる。	〔手稻〕
To	沼。湖。	〔頓別、トンベツ Toumpet〕
Tce, Toye	多くの。	〔豊似、トヨニ Toeni〕
Tomak	沼地。	〔苫小牧、トマコマイ Tomak-oma-i〕
Tomari	泊。港。	
Tui	起す。	〔越間、コイトイ Koitui〕
Tukara	あざらし。	〔砥莉向、Tukaramoi〕
Uhui, Uhuye	燃ゆる。	〔雄冬、オフユ Uhui〕
Uhuinupuri	火山。	
Un, (pl.Ush)	ある。の。	〔層雲別、ソーウンベツ Soumpet〕
Una	灰。	〔海邊、ウナベ Unapet〕
Urara	霧。	〔浦河、ウラカワ Urarapet〕
Ush	所。の。	〔幕西、マクニシ Makru-ush〕
Ushike	場所。略してUsh	
Wak	部分。分ち。	〔鬼脇、オニワキ Onnewak〕
Wakka	水。	〔稚内、ワツカナイ Wakkanai〕
Wenn	悪き。憎むべき。	〔宇遠内、ウエンナイ Wenn-nai〕
Yu	硫黄質の温泉。	〔夕張、ユーバリ Yupara〕

スキー地としての蝦夷富士

六 鹿 一 彦

蝦夷富士はアイヌ名によればマクカリヌプリ。之をシヤモの意義に解釋すれば後方に迂迴して登る山となる。東南方に聳ゆる尻別岳のピンネシリ(雄岳)に對してはマチネシリ(雌岳)と稱へられる。俗稱は蝦夷富士。和名は羊蹄山。詳細に云へば後方羊蹄山で之を訓じてシリベシ山と云ふ。後方をシリベシ訓ずるは當然として、羊蹄をシミ訓ずるのは羊の蹄が四であるからと云ふに至つては人の悪い洒落である。北海道獨得の漢字地名の判讀法に依る錦多峯(ニシタツブ)、大樂毛(オタノシケ)以上の難物である。世に名は体を表現す云ふ、スキー地としての蝦夷富士の山腹は、シリベシ山と訓ます後方羊蹄山の名と同様に仲々の難物である。

山の位置する所は北緯四十二度五十分、東經百四十度四十八分と云つたのでは判然せぬが、膽振國蛇田郡の北方に坐を占め、其の山頂火孔内中心が倶知安町、狩太村、眞狩村、喜茂別村、東倶知安村の分岐頂點となつて居る。樺太海馬島より南走する膽振火山脈に屬する休火山で標高一八九三米突、北海道内帯に簇生する山岳群中の最高峯である

歴史的に見ればアイヌの世界創造傳説に於て、大なる谷地の水陸渾沌たる中に一の凝つて堅まれるもの突出して世界(モシリ、浮ぶ地の意)の基をなせるが此の山である、云ふ事から始まるが、此んな古い事は抜きにして見ると人烟稀薄で時代文化の中心から隔絶した此の山には之を云つて示す可く誇る可き物がない。日本書紀にある齋明朝五年阿倍臣が東征した時の『可以後方羊蹄、爲政所焉、隨鹿島等語、遂置領而歸』を以て此の山麓に阿倍比羅夫が政所を開設した云ふ位の事であらう。噴火に關しては歴史的に知られて居らぬ。

北海道内帯中の最高峰である此の山は、其の截頭圓錐形の山容の端正秀麗なる點に至つては北海道中最優れ、駿河に聳ゆる富士山と其の美を争ふものである。山と云へば富士を想ひ、富士山頂の形を模したものを以て山と讀む日本人ゲイシャガールと櫻と富士とで世界に知られた日本國。此の國に生れた我々にはマリカリヌプリは懐しい親しい山である。一目見て『ア、富士山。蝦夷の富士山』の叫を擧げるのは必然であつてしかも自然である。妙高山の越後富

士、比叡山の都富士の様な文人墨客の苦しい戯れではないだから自然に山へ引き寄せられる、眼が、心が、身体が。敢て木花開耶姫命の愛嬌のある鼻に魅せられたのでもあるまいが、スキーランナーは頗る此の山へ登りたがる。先鞭をつけたのが例のレルヒ中佐である。其後は大學スキー部が屢々試みて居る。たが山には種々の型がある。夏期は左程でもないが、冬期特にスキーの登山となる其の登山目的によつて山を選ばねばならぬ。山の型に依つて登山目的を定めねばならぬ。唯漠然と山へ登るのでは快味が少ない否、苦痛が伴ふ、危険が伴ふ。だからスキー地としての蝦夷富士を考察するのは無駄な思想の遊戯ではあるまいと思ふ。況や名稱其れ自体に於て既に難物である此の山に於ておやである。

スキーランナーの眼に映ずる山には三種の型がある。低山型。中山型。高山型とも云ふ可く、之を例示すれば毛無型、毛稻型、芦別型と云へるたらう。何れもスキーの遊山地ではあるが、スキー登山になれば高山型及び中山型一部に行く事を指すのだらうと思ふ。然らば蝦夷富士はどの型に入るかと云ふに、中山型が大部分で、一部分が高山型に屬して居る。具体的に云へば先づ六合目までが中山型に屬し、其れより上方山頂に至るまでが高山型に編入せらるべきものであらう。従つて蝦夷富士登山と稱すべく、蝦夷富士遊山ではない。

故に蝦夷富士へ行くスキーランナーは同時にアルピニストたるべし、少くもアルピニストたんとするものなるべしと云ふ限定がつく。換言すれば蝦夷富士のスキー登山地としてのスキー地である。果して然らば如何なる特質を有し、如何なる程度の登山價値を有するか、即ちスキー登山に適するや否やを検討して見様。

先づ第一にスキー登山の目的が十分に満足せしめられるや否やを考へねばならぬ。處でスキー登山の目的なるものが頗る漠然として曖昧なものであるから困る。士氣を鼓舞し、抱負遠大の氣象を養成し、困苦缺乏に耐ふる身心を練磨するなんて事は登山の結果知らぬが、現在登山者の目的ではあるまい。恐らく大部分の登山者は個性の内的慾求に驅られて山を目指すのであつて、客觀的に觀察しては釋のわからぬものである。要するに登高の欽喜を享樂すればよいのである。夫れには大丈夫合格する……蝦夷富士は高山型の一八九三米突の山だもの。

登山の方は片づいたとしてスキーの方はどうか。此の點は一々具体的に價値批判が出来る。スキー地がスキーに適するや否やは次の点によつて決定し得られ様。即ち疲勞少くしてスキー快感の多く味ひ得る事である。登攀に苦痛少く、滑走に變化多き事である。密林や叢の爲に無駄の勞力を費す様な事がなく、滑降に際しては直滑降も廻轉滑降も或はスラロームも次から次へと變えて行ひ得る地形を提供

谷 圈

八月一日付外國電報として佛國シヤモニーの飛行家ダラフオール氏が一五七八二呎のモンブランの山頂に着陸したと云ふ記事を見た。此が初めての記録でありとすれば少し遅すぎる様に思はれる。飛行機で山頂に達する事は、漫書子が考へたのみならずアルピニストの中にも眞面目に考へた人があるに違ひない。熱心なアルピニストが、某々ホルンのフアーストアツツェンドを企てて失敗を重ねて漸う最高のピークにとりついた所が、今迄、人跡未到を信じ切つて居たのに、ふと見上げる頂に人が居る。「君は一体どうしてこゝへ登つて来たんだい」と聞くと、「いや僕は登つたんぢやない。おつこつて来たんだ」と云つた相だが。

兎も角、實際に飛行機で山頂に達することは、山地の悪氣流と着陸の困難とで今迄成功しなかつたのかそれとも、競争で忙しかつたにも依るのであらふが、今更珍しい事でもない。が此れから此の調子で、どん／＼と山へ登る家になつたら事だ。何しろユングフラウバインの例もあるのだから、唯高い山へ登ればいゝと云ふ極端なピークハンターでなくとも、強い好奇心を持つて居て、そのくせ原始的努力を拂ふ事を屈辱の様に思つて居る連中は此の方法で登ることであらふ。氷河横断や、岩壁登攀などを繰返す登山道がだんだん寂れてしまつて、或ひは四五世紀前の状態に復するかも知れない。

スノークラフトやロツククライミングは登山の手段であると同時にそれ自身に於て興味があるのだから眞の山男は却つてそうした荒廢した道を喜ぶかも知れない。然し乍ら切角登つても山頂に女小供がうようよ居られた日には耐らない。飛行機登山が最も優秀な登山法とせられる時には眞の山岳家はアルプスを去るであらふ。東洋に於ける山岳が彼等の目をひくに違ひない。

エヴェレスト登山の大計畫が立てられて、五月から、英國の遠征隊が入つて居る二年間十萬圓の計畫である相だ。何んな仕事でもいゝから儲つて呉れと云ひ出し度い人が大分そこいらにもあるらしいが、世界の最高峰、大地の窮極點を踏んで見たいものである。

行發日一月九年十正大 本納刷印日一廿月八年十正大

(行發日十五日一回二月毎)

錢十金部一價定

郎一納加者行發一敬橋板者刷印兼輯編

目丁二西條一北區幌札 所刷印 目丁四東條一南區幌札 所行發
社會式株刷印幌札 會の一キスと山

番五九四八樽小座口替振

する山がスキー地の上々である。蝦夷富士は此の點に於て如何であらうか。此點が問題の決する處である。

先づ登路を調べ様。元來此の山はマクカリヌブリの名が示す様に後志方面からは後方を迂廻して登る山と云ふ如く南方真狩村から登るのが昔の登路であつたのである。そして之は冬期も同様であつた事は幕末の蝦夷探險家松浦竹四郎の雌岳登攀記を見ても舊曆二月四日早朝雄岳(尻別岳)との中間地點から羊蹄山に登つて居る事に依つて明である。しかし此の方面は現在では斷崖が多くしかも交通の不便である爲顧みられぬ。現在は矢張夏期の登山道に沿つて登るが。此方面は傾斜から見ても最適當して居ると思ふ。即ち傾斜角は

東 三十二度 西 二十八度
南 三十五度 北 三十八度

を算して居るから、比羅夫方面の西麓から登る此の途が交通や宿所の關係を離れて云つても最望ましい。

愈山に入つてからの様子はさうかゞ云ふに、雪さへ良好なれば理想的である云ふだけで充分である。灌木の茂はない、針葉樹の美林に霧水に飾られた樺の華麗な並木で登攀の疲勞は忘れてしまふ。六合目以上の無立木地に出れば見るも快い純白の大雪壁が脚下から顔に接して突立つて居る。一歩／＼踏み出す足に全身の神経が凝集して、頭がピンとする程緊張する其の氣分が堪らなく氣色がよい。キツ

クターンの度毎に見る氣もなし、又努めて見ぬ氣であるのに竊に視線の走る脚下に恐ろしく長大な雪面が快い曲線美を示して走つて居るのは此處ならではの味はへぬ不安の快感である。頂上近くになつて氷化した堅雪が顯れ始め、氷斧を振ふ様になればアルピニスト氣取りの好奇心は充分に満足させられる。しかも此の登路には斷崖や雪崩が殆んど無いから結構である。勞少くして得る處の登山氣分は快感とは案外に多い。

滑降の點では恐ろしく素晴らしい山である。山頂附近ではビク／＼物の斜滑降、八合目から六合目までは膝まで位雪に埋りつゝ自由な廻轉滑降が行はれる。リ、エンフェルド式スキー術はステムボーゲン以外に何物もないと罵つては居るものゝ、此んなステムボーゲンをやるに、之だけで澤山だとり、エンフェルド式スキー術を賞揚したくなつて来る。それ程愉快に廻轉滑降が出来るのである。此んな斜面は恐らく他に求めても難しいだらう。五合目から四合目に至る幅一町長さ十四五町の大空地は理想的の直滑降が行はれる。スラロームを盡くも御意の儘である。斯くて其れ以下は山麓まで森林中も縫つて滑るのであつて、其の滑降に變化のある事さ、しかも其の距離の長大なる事さ、此の山の大きい特長とし誇示すべき點である。何しろ山頂より山麓までの滑走距離を、其の斜面の長さに於て測定すれば(傾斜を二十八度と見て)約四十四町餘となる(四頁へ續く)